

近現代における宮座の変容と持続について——北部九州の宮座を事例として——

山口 信枝

はじめに——研究視座——

宮座についてはこれまで歴史的研究を中心として、貴重な研究成果が蓄積されてきており、人類学、民俗学、近年では環境社会学等の分野からの研究がおこなわれている。⁽¹⁾しかしながら宮座は戦後に解体したものとみなされて、管見の限りにおいては近現代を対象とした研究は少なく、その研究課題は宮座の解体過程とその要因についての考察が主流である。そして戦後六〇年を経過した現在もなお、持続している宮座があるにもかかわらず、戦中戦後についての研究は更に少ない。筆者は宮座という村の宗教集団の変容と持続について、近現代における日本社会の変動と関連

させながら考察をおこなってきた。

筆者の研究課題は、従前の宮座研究に続く研究として、宮座が明治期以降戦中戦後期における社会状況の変化の中で、どのように対処し変容してきたかというその変容過程を検討し、現代における宮座の存在意義について考察することである。この研究課題にむけて北部九州の宮座の調査を実施してきたが、本論ではこれまでの調査を総括し、全体について考察をおこなう。

宮座は一般的には「神事執行について独占的な権能を氏子内部においてもつ集団」⁽²⁾と説明されるが、宮座の定義については統一されていないといえず、「特権的祭祀組織」⁽³⁾と「神事組合」⁽⁴⁾説がその代表的なもので、「村一つに限

るただ一つの神社の座」という定義もある。⁽⁵⁾ また、宮座にはその加入資格において、一定の家筋に属する者に限られる株座と、氏子であることが参加条件とされる村座の二類型が設定されている。⁽⁶⁾

なお本論においては、「宮座は産土神社において座と呼称する祭祀集団であり、株座と村座を含む」という基本理解のもとに考察をおこなう。そして宮座という言葉は、宮座組織と宮座構成員の双方を指して使用されることがあるため、原則として宮座組織を表わす場合は「宮座」、宮座の構成員を示す場合は「宮座構成員」と区別する。また産土神社が鎮守する地域を、現市町村名にかかわらず「村」と表記する。これは自然村の地域にほぼ該当することによる。

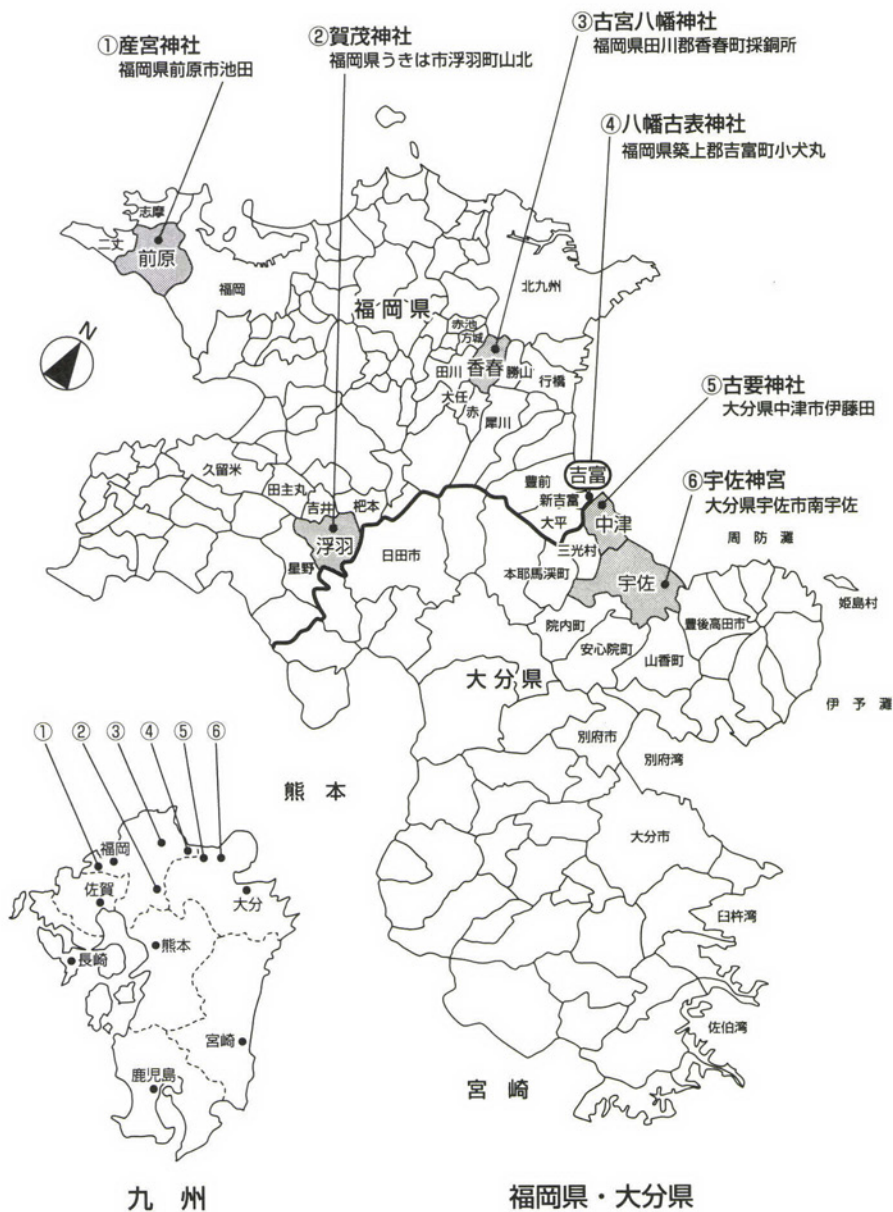
宮座は村の生活なかの宗教的側面の表れであるが、その地域の宗教行事のみならず、政治、経済、社会、人間関係と密接に結びついており、村落共同体におけるさまざまな場面において、宮座の構成員が関係してきた。具体的には、宗教的な特権が日常生活全般にまで延長する、社会的特権は結婚相手の選定要素となる、政治的特権は村役人の選出となる、経済的特権は村山・入会山の支配権、水利権

の保有となる等である。⁽⁷⁾

宮座が存在する地域としては、畿内を中心として近江がその代表的な地域として考えられているが、北部九州にも比較的多くの宮座が存在していた。⁽⁸⁾ しかしながらこれらの宮座についての研究は少数であり、近現代を対象としたものは更に少ない。また加入資格が厳しく制限された株座についても、畿内や近江が中心とされており、研究事例もこれらの地域ものが多い。筆者は北部九州の宮座調査において、現在も持続している株座形態の宮座と、村座形態の宮座を確認することが出来た。また規約上は廃止された宮座が、実質上は持続している事例も旧株座であった。そして宮座が時代とともに変容しながら現在もなお、「お座元、お宮座、神和」という地元での呼称とともに、祭祀が執行されている宮座の調査をおこなってきた。

本論ではそれぞれ異なった宮座の形態が明確に表れている四つの宮座を選択し、考察の対象とした。その宮座は、古宮八幡神社（福岡県田川郡香春町採銅所）、古要神社（大分県中津市伊藤田）、賀茂神社（福岡県うきは市浮羽町山北）、産宮神社（福岡県前原市池田）の各宮座である（地図参照）。戦後も株座としての形態を守りながら持続している

近現代における宮座の変容と持続 調査地 地図神社名



古宮八幡神社の宮座、戦前から村座の形態で傀儡子(操り人形)奉納神事が中心となり持続されている古要神社の宮座、形式上は昭和初期に株座が消滅し村座のなかに組み込まれながらも、旧株座の機能を持続している賀茂神社の宮座、戦前の宮座は解体したが、旧来からの家筋による中核であった株座が持続している産宮神社の宮座である。

宮座は中世・近世期を通じて社会状況の変化とともに変容してきたことは、これまでの歴史的研究で明かにされており、明治期以降はその変容が更に顕著である。近現代においては明治期以降の社会変動があり、太平洋戦争敗戦後は国家神道の廃止や農地改革が実施され、続く高度経済成長による社会状況の変化等があり、旧村を単位として営まれてきた宮座が解体していくことは当然の成り行きであった。しかしながらそれでもなお、持続している宮座がある。これはなぜなのであろうか。

以下、各宮座事例について概説し、宮座の変容と持続について考察をおこなう。

一 北部九州の宮座事例

(一) 祭帳にみる戦前戦後の宮座(株座の持続)

——古宮八幡神社(福岡県田川郡香春町)の宮座事例——

古宮八幡神社(香春町採銅所)の宮座は、戦前の形態を残しながら、現在も株座として持続している宮座である。¹⁰⁾戦前戦後期における社会情勢の変化の中で、宮座がどのように対処し変容してきたかを、各宮座が保有する祭帳の記録を通して考察した。

「お宮座」と呼称される古宮八幡神社の霜月未祭は株座で、宇佐神宮(大分県宇佐市)へ養老四年(七二〇)に銅鏡を奉納したという伝承を宮座開始由縁としている。旧上採銅所村と旧下採銅所村と旧採銅所町の三地区に分かれて、本家筋の大宮座と分家筋の古(小)宮座が合計五つ存在していた。現在は四つの宮座が持続している。このほかに町場の宮座である「大えびす」も株座で持続している。各宮座が保有する祭帳は「御神体」化した取扱(後述)がなされ、宮座祭は自宅で執り行うという特徴を有する。

宮座の収入は、戦前までは宮田からあがる小作米によって賄われており、講の貸付が行われていた。戦時中は戦争

の影響による物資不足と節約の時勢が宮座にも影響した。

宮座は戦後の農地改革で運営資産の宮田を失い、宮座の存続について話し合いがおこなわれた。宮座構成員全員参加による協議の結果、規模を縮小して株座のままで宮座を持続していくことで合意した。旧村単位の祭から組単位の宮座祭となったが、産土神社は旧村単位のままで保持している。

この村は宮座のほかにも祭が多く、一戸で複数の祭組を担っている。その中で宮座構成員は、村の自治を担う中心的存在である。

(2) 傀儡子神事を継承する宮座（村座の持統）

—— 古要神社（大分県中津市）の宮座事例 ——

古要神社（中津市伊藤田）の宮座は、養老四年に宇佐神宮放生会へ傀儡子神事を奉納したという伝承を宮座開始由縁とする村座である。傀儡子は糸で操る棒状の杖頭人形で、奉納神事を執行する座元の交替式である「ニワタシ（荷渡し）」を中心として、傀儡子が着る神衣（かみ）の虫干し行事が神事化された「オイロカシ（乾衣祭）」が執行されている。

祭は毎年神楽が奉納され、閏年の夜、現在では三年に一度、人形の古態を表す傀儡子の舞と神相撲が奉納される。

この村では二月の初寄りで部落全約五〇戸が集まり、年間の部落運営について話し合う。この神社は常住の神職が不在であり、宮座の引受組は神社の年中行事の運営を担当する。宮座の形態は部落の全戸が参加する村座で、座元という宮座の言葉を残している。村は四組で構成され、各組に宮総代が置かれ、その中から総総代（そうそうだい）が選ばれる。区長と宮総代は村の人格者が選ばれ、部落の神事と日常生活両面における指導者である。座元は祭の引受組の年長者が順次引受ける。

祭が終了すると一年任期の座元が交替する。この行事が「ニワタシ（荷渡し）」である。このニワタシはニウケ（荷受け）とニオクリ（荷送り）の組で構成される。新旧座元の交替式は旧座元宅で行われ、神具目録（しんぐ）と宮座道具の突き合わせは、新旧双方の座元引受組の人達が神社に集まり、境内の舞殿で行われる。傀儡子奉納神事が執行される年には、年齢階梯的組織で祭の準備と運営がなされる。

産土神社の祭を中心に座元引受組の人達は、神社行事の集まりのなかで、日常生活の出来事を話し合い、決め事も行

う。四年に一度回ってくる座元引受は、次回年度における組内の年齢構成を再確認し、将来構想を描く場ともなる。

この村の人達は現在でも古要神社の神事を暮しの軸としながら生活を営んでいる。

(3) 宮座と村の動向(旧株座の変容と持続)

——賀茂神社(福岡県うきは市)の神和(宮座)事例——

賀茂神社(うきは市浮羽町山北)の宮座は、形式上は廃止されたにもかかわらず、拡大した氏子祭に旧株座が組み込まれ、氏子祭の中で宮座の機能を持続している宮座である。明治・大正期を中心に戦後期を含めて、政治、山林、水利問題が発生し、村の指導者層である宮座構成員間の対立と協力があり、宮座運営も変容してきた。

賀茂神社の宮座は神和じんわと呼称され、創始は不明であるが社伝によると、寛永六年(一六二九)に霜月初酉祭として復興されたという。神和は吉瀬家きちせ、河北家かほきた、神職熊懐家くまぐわい、それに地元の有力家筋によって構成されていた。神和は村の祭祀集団であるとともに、近世を通して地域の指導者集団として、社会状況の変化とともに行動し、村を運営してきた。近代になると政治面においては、明治の第一回総選

挙に前後して政治運動が活発化し、党派間の暴力行為も発生した。各有力家筋が入交じりながら、各派に分かれて活動した。経済面においても問題が発生している。ことに山林問題では神和構成員同士が争い、大審院の判決を仰いでいる。この問題については戦後再度論争が発生するという火種を残した。また水利問題は隣村との盗水騒動や他村との間で発生した井堰問題で、当時対立関係にあった神和構成員が、一致団結して交渉にあたっている。

このような社会状況とともに神和規定が変更されていく。明治期には規約上は神和祭と氏子祭の区別をなくし、全氏子が参加する氏子祭となり、大正期には規定額以上の祭資寄付者に神和構成員待遇がなされるという、経済重視の規定変更が行われた。そして昭和初期に神和構成員からの申し出により、神和は形式上は消滅した。にもかかわらず旧神和の系譜をひく家々は、氏子祭において役職の肩書きを変えながら存続している。賀茂神社の旧神和構成員は、氏子祭のなかで村の統一をはかり、自治を運営している。中核的存在であり、現在でも旧神和の機能を持続している。

なお山北には賀茂神社を中心として、山北三社と呼ばれ

る日吉神社と三次神社にも神和があり、この二社は小社ではあるが、現在も株座のままで神和を持続している。賀茂神社の旧神和構成員の多くはこの二社の神和構成員であり、このことが旧神和がその機能を持続している要因のひとつになっていると考える。

(4) 地域の都市化と宮座の変容(旧株座の持続と新株座の解体)

——産宮神社(福岡県前原市)の宮座事例——

産宮神社(前原市池田)の宮座は、戦前の宮座は解体したが、その中核であった旧来からの家筋による宮座は現在も持続している株座である⁽¹³⁾。戦前は旧来より宮座を執行してきたとされる三家(以下、本宮座という)を中核として、これに約二〇家の地元有力家加わった株座の宮座(以下、新宮座という)で構成されるといふ、株座の二重構造で運営されていた。戦後は民主化運動に伴い差別的制度廃止思想が唱えられ、新宮座は廃止されたが、新宮座が執行していた「百手の射神事」は、現在は氏子組織の祭として継続している。一方本宮座は戦後も株座のままで持続しており、旧来から「宮座」と呼称される神事を持続している。

また本宮座三家と宮司家には、通称「お宮」と尊称される「フジョウバコ(不浄宮カ)」が保有されており、この宮は妊婦の股に挟むと産が安くなるという民間信仰がある。

神社が鎮座する旧池田村は、福岡市への通勤・通学圏として人口が急増している。昭和前半期までは都市近郊の專業稲作地帯であったが、現在は兼業稲作地帯になっている。生業の変化は日常生活にも影響を与え、現在では神社行事への氏子参加や、農作業を機縁とした集合は減少している。社会生活は都市化し、行政単位の生活様式により、旧村の組単位の結合は弱体化し、神事も経済的価値判断や個人生活優先で解釈されるようになってきた。

このような状況にありながらも産宮神社の宮座は持続している。その要因のひとつは、「フジョウ宮」の存在があるのではないかと考える。この宮は先祖から引継がれてきた視覚象徴物であり、宮座の持続とともにこの宮も存続してきた。その一方で、この宮の存在が宮座構成員の物質的な拠りどころとなり、宮座に加入する人々を維持し持続させてきたのではないだろうか。

二 宮座の特徴的側面

(一) 宮座文書の「御神体」化について

——古宮八幡神社の宮座文書事例——

宮座事例(一)で紹介した古宮八幡神社の宮座は、一七世紀前半から今日まで書き継がれてきた文書を保有している⁽¹⁴⁾。そのなかで中心となるのが「御託宣^{おたまげ}」と呼ばれる神名または神像が描かれた掛軸と、「祭帳」と呼称される宮座出席者名簿である。宮座の運営資産である宮田の権利以外は実質的な利益や権利に関する記録は見当たらず、その宮田も戦後の農地改革で失われている。しかしながらそれにもかかわらず宮座は持続している。

文書は帳箱に納められ、薦に包まれ、御幣が立てられている。薦包には座元により沙井^{おし}(海水)と神酒が供えられ、礼拝が行われる。これらの宮座文書は、日常的には見ること触ることが暗黙の了解のもとに禁じられている。しかし宮座祭では薦包は開かれ、祭帳に書き込みが行われる。この後再び閉じられた薦包は、新座元に抱きかかえられ、太鼓や鉦等の先払いの音とともに新座元宅へと運ばれる。

宮座構成員は祭帳に書かれた名前により、村の構成員であることを自他共に確認し、祖先に続く自分自身を認識する。祭という儀礼のなかで文書が書き継がれ、宮座の持続とともに文書も存続する。その一方でこの文書の存在が、宮座構成員の精神的な拠りどころとなり、宮座を維持し持続させてきたのではないかと考える。文書は宮座を視覚的に示す座元引継の象徴となり、祭日に引継がれ一年毎に村内の座元宅を巡回する。

(2) 古宮八幡神社と古要神社による

宇佐神宮(大分県宇佐市)放生会奉納神事

宮座事例(一)と(2)で言及した古宮八幡神社と古要神社の宮座は、ともに宇佐神宮放生会^{ほうじょうえん}への奉納神事を宮座開始由縁⁽¹⁵⁾としている。宇佐神宮放生会はこの二社をはじめ、宇佐神宮と深いつながりを持つ神社が協同して執行する。ここではその神事について概説する。

この奉納儀礼は三つの組織によって構成されている⁽¹⁶⁾。第一は豊前国司が田川郡の採銅所に鎮座する古宮八幡宮(旧神社名)に参向し、銅鏡を鑄造し、この銅鏡を宇佐宮(旧神社名)の御正体^{みしょうたい}(御神体)として奉納する。第二は旧上

毛郡の古表社、下毛郡の古要社（旧神社名、いずれも古くは三毛郡）が船でその御神体である傀儡子の供をして海上渡御を行い、放生会で傀儡子の舞を奉納する。第三は宇佐宮と弥勒寺・中津尾寺・六郷山が放生会の総まとめの儀式を引受ける。宇佐神宮放生会は広範囲に及ぶ地域の人々が日数をかけて儀式を行い、行列をして陸路を歩く、あるいは船団を組んで海路から宇佐の和間浜へと集まり、全体がひとつとなり放生会を執行したのである。

古宮八幡神社の「オマガリサマ（銅鏡）の祭」は、銅鏡を宇佐神宮の御正躰として奉納したという伝承に由来する祭である。文献史料によると、この祭は銅鏡鑄造の地から出発し、行列は緩急をつけた時間区分と長短の移動行程を経ながら宇佐へと進む。このなかの巡礼地の一つである凶首塚（凶土塚）は、朝廷に対して反乱を起こした隼人が宇佐神宮の尽力により鎮圧され、その首が埋められたとされている古墳である。この凶首塚と道を挟んだところに、古要神社と八幡古表神社（福岡県築上郡吉富町）の傀儡子が身を清める化粧井戸がある。この地で銅鏡と傀儡子の行列は宇佐神宮の御神幸と合流する。その後各行列はひとつになり和間浜へと向かい、隼人の生れ変わりとなされる蛭を海

に放つ。

この祭はさまざまな因子を含んでおり、朝鮮半島からの外来因子が相当強く移入されているようである。宇佐神宮放生会開始由縁を共有する各集団が、宇佐神宮と関連する地を巡りながら御神幸をおこなう。各集団に属する人々はこの祭をおこなうことにより、それぞれがアイデンティティーの確認をおこなう祭であると考ええる。

(3) 傀儡子の住吉大神と朝鮮半島の傀儡子芸能

——古要神社と八幡古表神社（福岡県築上郡吉富町）

と朝鮮半島の傀儡子事例 ——

宮座事例(2)で言及した古要神社とその姉妹社の八幡古表神社は、最初はともに「古表社」と呼ばれており、隼人の反乱鎮圧のために宇佐神宮に協力した。その時の様態を表したものが傀儡子の舞と神相撲であるという伝承を共有している⁽¹⁷⁾。二社が保有する傀儡子には相違する点もあるが、傀儡子の形態や奉納神事の演目は同じであり、氏子とともに傀儡子を「お神様」と呼び崇敬している。傀儡子のなかで相撲人形の住吉大神は、黒色もしくは黒褐色の肌色で赤のマワシを締めている。傀儡子が奉納する神相撲で

は、西方の住吉大神が東方の相撲神との取組すべてに勝利するという定型の勝負結果で終了する。

これらの傀儡子と酷似しているのが、朝鮮半島の流浪芸人集団によつて操られる傀儡子芸能の「コクトウカクシノルム」である。⁽¹⁸⁾内容は特権的文官の両班や破壊僧批判を含んだ民衆の娯楽風刺劇で、神事儀礼の役割を担う傀儡子の舞や神相撲とは意味内容が相違する。しかし使用する人形の形態、舞台装置、構成は同一であり、傀儡子の住吉大神に近似する洪同知^{ホンドンチ}という人形が登場する。傀儡子が敵方誘出手段として利用されたというその開始起源説話も類似している。これらのことを考えあわせてみると、宇佐神宮放生会で重要な位置を占める傀儡子には、朝鮮半島の文化因子を見出すことができる。

三 宮座の変容と持続

(一) 宮座の特色

以上、これまで述べてきた各宮座の変容と持続の様態を一覧表にまとめた(次頁参照)。これにより宮座の特色、視覚象徴物の持続と宮座開始由縁の共有、宮座持続の要因、宮座の機能と存在意義について検討する。

まず宮座の特色であるが、ここで紹介した宮座には六つの特徴が見られる。①宮座構成員間の平等意識、②複数の祭組の重なり、③宮座が保有する視覚象徴物の存在、④畿内との比較において宮座の双分組織が見出せない、⑤一つの産土神社に複数の宮座の存在、⑥一つの村に複数の産土神社とそれぞれの宮座の存在である。これらが九州の宮座に共通するものであるか否かについては、今後の課題とする。以下上述の番号毎に解説をおこなう。

①宮座の要素として一般的には年齢階梯制があげられる。年齢によつて区切られた段階や地位を順次一つずつ移行していき、各段階に至るにはなんらかの資格や儀礼が必要とされる年齢序列制のことである。しかし本論の宮座では、宮座構成員間の平等意識がみられる。座順は年長者から順次上座に着座していくが、これは年長者に対する敬意の表われという感があり、座順は固定していない。賀茂神社の宮座では、常に庄屋の次に着座する家筋があるが、それ以外は定められた座順は確認出来なかった。また、座順は年番で回ってくる祭の引受役によつて定められている宮座もある。古宮八幡神社の宮座では、大祭時に年齢階梯的組織が表れるが、これは年齢役割分担のように見受けられ

表1 「宮座の変容と持続」

() 現市町名 旧村名 神社鎮座地	(香春町) 探銅所村 探銅所	(うきは市) 山春村 山北	(中津市) 三保村 伊藤田	(吉備町) 東吉富村 小穴丸	(前原市) 前原町 池田			
						産土神社	古宮八幡神社 (旧村社)	蛭子神社(古宮 八幡神社末社)
宮座の分類	株座	株座	旧株座 現氏子	株座	株座	村座	旧神職 現氏子	株座 → 株座 旧株座 → 現氏子
宮座の呼称	座本 ^(宮座)	大えびす	旧呼称 神和	神和	お座元 * 両神社は姉妹社	宮座	神事は神社 直会は座元宅	
祭の 執行場所	座元自宅 戦時中は神社 戦後は公民館の使用もあり	神社	神社	神社	(以下は古要神社の宮座) 神社	神事は神社 直会は座元宅	3反(宮座) → 3反(神社保有)	
宮田(祭田) 戦前 → 戦後	5反1畝24歩(上採) → なし	6反9歩 ⇒ なし	5反8畝17歩 ⇒ 4畝(買戻)	1反9歩 ⇒ 27歩	3反 → 8畝	宮座構成員家の 戸数割	戦後、拡大した 宮座(新宮座)は 解体、「百手の射 神事」は氏子祭 の神事へ。 戦後も旧来から の宮座(本宮座) は持続*「宮座」 神事は旧来通り 本宮座が執行。	
現在の 祭費用	宮座構成員戸数割	年間積立金と 引受組戸数割	宮座構成員の 戸数割	宮座構成員の 戸数割	座元引受組の戸数割	宮座構成員家の 戸数割	戦後、拡大した 宮座(新宮座)は 解体、「百手の射 神事」は氏子祭 の神事へ。 戦後も旧来から の宮座(本宮座) は持続*「宮座」 神事は旧来通り 本宮座が執行。	
変容・変更 中止・消滅	戦後は旧村単位の祭組は持続 しつつ、祭の執行は小字単位。 戦後下採の古(小)宮座中絶。	村社 → 郷社。 株座 → 氏子祭 宮座規定の変 更を重ねた 後、株座廃止。	—	鎮座年代と 「モトミヤ (元宮カ)様」 の呼称から、 最初はこの神 社が山北の産 土神社でない かと推測。	大祭は閏年 → 3年毎。 神具預かりは座元宅 → 宝物庫 (佛龕子庫)。 (用語消滅)。「トウワクタシム」 「トウシヨク」、座元宅を表示 する「ムツカラ」。	戦後、拡大した 宮座(新宮座)は 解体、「百手の射 神事」は氏子祭 の神事へ。 戦後も旧来から の宮座(本宮座) は持続*「宮座」 神事は旧来通り 本宮座が執行。		

表2 宮座の特色

	宮座の特色	内 容
共通特色	①宮座構成員間の平等意識	古宮八幡神社の宮座（株座） 蛭子神社の宮座（株座） 古要神社の宮座（村座） 産宮神社の宮座（株座） *（例外） 古要神社の宮座（大祭年には年齢階梯制的形態をとる） 賀茂神社の宮座（株座） （氏子祭で河北本家の座席指定有）
	②祭組の重なり	宮座・祭神別・隣組の祭（中心となる神社） 採銅所村・・・・・・・・古宮八幡神社 三保村伊藤田・・・・・・・・古要神社 山春村山北・・・・・・・・賀茂神社 池田村井田・・・・・・・・産宮神社
	③宮座が保有する視覚象徴物の存在	宮座文書（各宮座が保有する） 古宮八幡神社の宮座 蛭子神社の宮座 古要神社の宮座 賀茂神社の宮座（神社蔵のものも有り） 日吉神社の宮座 三次神社の宮座 傀儡子 古要神社の宮座 （八幡古表神社は神社蔵） フジョウ宮（本宮座の宮座構成員各家と宮司家が保有、安産利益の民間信仰有り） 産宮神社の宮座
	④畿内との比較において 双分組織は見出せず	各宮座とも独立執行 本家筋・分家筋の宮座として別々に運営
個別特色	⑤一つの産土神社に複数の宮座	古宮八幡神社に現在四つの宮座あり （戦前は五つの宮座あり）
	⑥一つの村に複数の産土神社とそれぞれの宮座	「山北三社」・賀茂神社の株座は規約上は廃止されたが、宮座の機能は持続 ・日吉神社の宮座 ・三次神社の宮座

た。

②各地域では宮座の他に、隣組、祭神別等の祭組が、複数重なりあいながら持続している。例外は都市化した地域に持続する産宮神社の宮座であるが、この地域でも戦前までは多くの祭がおこなわれていた。

③具体的には、古要神社の宮座が保有し、氏子から「お神様」と尊称される傀儡子である。もう一つは産宮神社の宮座構成員各家と宮司家に保有されているフジョウ宮であり、これには安産利益の民間信仰がある。そして産宮神社以外の宮座には、各宮座が保有する文書の存在がある。宮座

表3 宮座の持続に影響を及ぼす要因

宮座の持続に影響を及ぼす要因		宮座	内容
①視覚象徴物の存在	宮座文書	古宮八幡神社の宮座 (蛭子神社の宮座)	文書の「御神体」化、祖先からの継続認識
		古要神社の宮座	座元は「神具目録」で引き継ぐ、祖先からの継続認識
		賀茂神社の宮座 (日吉神社の宮座) (三次神社の宮座)	祖先からの継続確認
	傀儡子	古要神社の宮座	祖先からの継続確認
		八幡古表神社	傀儡子は「お神様」と尊称される
	フジョウ宮	産宮神社の宮座	祖先からの継続確認 「お宮」と尊称される 宮の利用者の存在(一般民衆からの認証有り)
②宮座開始由縁の共有	古宮八幡神社の宮座	銅鏡奉納神事	宇佐神宮放生会を合同執行 両社は姉妹社
	古要神社の宮座	傀儡子奉納神事	
	八幡古表神社	両社は姉妹社	
	賀茂神社の宮座	旧株座の家筋で、地域の名望家	
	産宮神社の宮座	「神社を最初に建てて守ってきた家筋である」という口伝の共有、「宮座」神事の執行	

の持続とともに夫々の視覚象徴物も持続している。

④宮座には左座・右座あるいは東座・西座というように全体として双分的な組織形態を示し、儀礼行事で一對となりながら交互に一定の地位役割を分担する様相が、宮座分析指標の一つとされている。²⁰⁾この双分組織は現時点においては見出すことが出来なかった。これについては今後更に検証を深める必要があると考えている。

⑤一般的に宮座は一つの村に一つの宮座とされている²¹⁾が、古宮八幡神社の宮座は、一つの産土神社に現在四つの宮座(戦前は五つの宮座)が持続している。最初から一つの産土神社に複数の宮座が存在したのか、あるいははもともとは一つの宮座であったものが時代とともに複数に分離したものであるのかということは確認出来ない。

⑥産土神社は一つの村には一つに限る、その村でもっとも古くから村とともに存したものであるという説がある。²²⁾

しかし賀茂神社が鎮座する山北では、三つの神社が産土神社とみなされており、しかも現在では他所から勧請した鎮座年代が三番目のものが産土神社の中心である。産土神社の存在も時代とともに変容している。

表4 宮座持続の要因

宮座持続の要因	内 容
①宮座がもつ村の統合機能の保持	村の結束力と連帯感の強さ 座意識の堅持 宮座構成員と座元引受者の意識の高さ 名望家の存続
②宮座の封鎖性の持続	自村意識 自己認識の顕在 村の内側にに向けて働く力

表5 宮座の機能と存在意義

宮座の機能と存在意義	内 容
①村の団結と統合意識の強化	産土神社のための集合と共同行動の繰り返し
②自己認識の獲得	直会での神人共食→祖先の認識→自己認識→子孫へ続く自己存在の連続
③村の秩序の確認	産土神社の祭を執行する村の代表者を視覚的に確認
④親族交流	旧来の親族や新たに加入した姻族が交流する時間と場の提供

(2) 視覚象徴物の持続と宮座開始由縁の共有

各宮座にはそれぞれ宮座開始由縁があり、宮座に引継がれてきた視覚象徴物を保有している。これらが宮座の持続に影響を及ぼしているのではないかと考える。

古宮八幡神社と古要神社の宮座では、文書は座元の物質的象徴として祭日に引継がれ、一年毎に村内の座元宅を巡回する。賀茂神社には、寛文年間の宮座構成員名と明治期の宮座構成員名とを対比させた文書があり、二百年間の時空を越えて各家の繋がりが記録されている。なお古要神社の宮座では、文書とともに、氏子が操る「御神体」の傀儡子を保有している。そして産宮神社の宮座では、宮座構成員家に「フジョウ宮」が保有されており、産神を象徴するこの宮は、安産を祈願して借用した一般民衆からも認証されている。

もう一つの要因は各宮座が保有する宮座開始由縁である。古宮八幡神社と古要神社の両宮座は、宇佐神宮放生会への奉納神事を宮座開始由縁としている。同じ伝承を共有する集団が各地でそれぞれの祭を引継いでいる。このことを思い起こすこと、そのことがまた各宮座を持続させる要因となっているのではないかと考える。賀茂神社の宮座構

成員家は、旧来より産土神社の運営に携わってきた村の有力家筋であることが、文書からも日常生活の面からも、自他共に認識されている。産宮神社の宮座構成員は「自分達は、産宮神社を最初に建てて守ってきた家筋である」という口伝を共有している。

(3) 宮座持続の要因

本論で取り上げた宮座の持続要因を考察するにあたり、この対概念である宮座解体の指標を参考文献から抽出した⁽²³⁾。それによると宮座の解体について、二つの指標が見出された。①経済的優位性と身分意識が廃止され、村人が平等になった場合、②村以外のものに対する意識を含めて、宮座の封鎖性が解消された場合である。この指標を本論の宮座事例に当てはめて検証をおこなってみる。

本論の宮座事例では、宮田を失った後も宮座は持続しており、経済的優位性の廃止が宮座の解体要因とはなっていない。また身分意識とは多少意味合いは異なるが、いずれの宮座も座意識が堅持されており、各宮座を構成する村の名望家が現在も存続している。

次に宮座の封鎖性については、村人のなかに村外に対す

る意識の封鎖性が保持されている。産土神社の宮座祭を中心として村内の各神社の祭を執行していくなかで、村の統合機能が有効に作用し、村の暮らしがつながれている。これと一部内容を異にするのが産宮神社の宮座である。都市化した地域に持続するこの宮座は、村の統合機能の保持という要因は希薄化している。

このようなことから、本論で考察をおこなった宮座が持続してきた要因は、①宮座がもつ村の統合機能の保持、②宮座の封鎖性の持続、この二つにあると考える。時代とともに変動する社会情勢や政治・経済活動のなかで、村の自治を保持し運営していくために、宮座の存在が有効に機能してきたことを示している。

(4) 宮座の機能と存在意義

本論では宮座の変容と持続について考察をおこなってきた。結果として宮座のもつ機能が村の生活に必要とされ、宮座の存在意義となっているのではないかと考える。その宮座の機能とは、①村の団結と統合意識の強化、②自己認識の獲得、③村の秩序の確認、④親族交流、以上四つである。

①は村人が集合することにより発生し強化される。産土神社のための集合と共同行動の繰り返しは、村の団結と統合意識を強化する要因になっている。村人にとって産土神社の祭は、社会生活が円滑に営まれ、村の自治が運営されていくために有効であることが窺われる。また村人の集合に関してはこの他に、複数の祭組の重なりと農業の共同作業がある。村人は聖俗両生活において集合し村の暮しの基盤が固められていく。

②は宮座祭の執行が村人にとって自己認識の獲得の場となっている。産土神はその村を象徴し守護する。その産土神の祭で、村人あるいは村人を代表する宮座構成員は、聖的空間で会合し直会で産土神と共食する。この神人共食により、村を意識し祖先を思う。祖先を思うことにより、それに繋がる現在の自分自身の存在を確認する。そして子孫を思うことにより、未来に続く自己を認識する。²⁴祭の中で改めて自己認識の獲得がおこなわれ、村人は再び俗なる日常生活を営んでいくのではないだろうか。

③は産土神社の祭で村の代表もしくは指導者の存在が具象化される。稲作を生業とする農村は、多くの共同作業を必要とする。そのため村の代表者の存在は重要である。産

土神社の祭を執行する神事の代表者は、日常生活においても村の代表者であり指導者である。このことが神事を通して村人の目に確認されるのである。

④は宮座祭が女性を軸にした親族交流の場になる。宮座祭が旧来の親族や、新しく加わった姻族が交流する時間と場を提供する。また直会の席は、年頃の子女をもつ親にとっては縁談の場となり、同じ階層の家同士の結びつきがおこなわれている。男性中心で運営されてきた宮座祭が、結果的として女性とも深く関わる祭となっている。ただし、都市化した地域に持続する産宮神社の宮座では、現在は①の機能は見当たらない。更に③については、「どうしても彼らだけが特別のことをしているのか」という村人の反応もある。

本論で取り上げた宮座には、上述のような機能が村の生活に有効的に作用している。これらの機能は今日においても必要とされるものであり、これが宮座の存在意義となり今日まで持続していると考ええる。

おわりに

古宮八幡神社・古要神社・賀茂神社・産宮神社の各宮座

を中心として、宇佐神宮と八幡古表神社の事例を引用しながら、近現代における宮座の変容と持続について考察した。社会状況の変化としては、明治維新以降の社会変動があり、明治末期の神社整理政策、町村合併、戦後の連合国軍総指令部（GHQ）による国家神道の廃止、農地改革、高度経済成長による都市部への人口流出、生業の変化等により、村落共同体で営まれてきた宮座が消滅していくことは当然の成り行きであった。しかしながらそれでもなお、変容しながら持続している宮座がある。

近現代における村の政治や経済、社会、人間関係等はさまざまな要因が交錯しており、宮座の視点からだけで考察することには勿論限界がある。しかしながら産土神社のもとで宮座の機能が持続し、村の統合の重要な契機になっていることは否定しがたい事実である。村を考えると、宮座は今後もなお無視できない一つの重要な因子と思われる。宮座の機能は、村の自治意識の希薄化や、自己認識の喪失等が問題とされる現代社会において、改めて必要とされているのではないだろうか。

なお戦後期以降は重要な問題を多数含んでおり、現代における宮座の研究については、別途考察をおこなう必要が

ある。近現代を対象とした宮座研究の現況は、解明されるべき多くの課題が残されている。

- (1) 宮座研究史としては、桜井純子の「宮座論ノート」（社会伝承研究会編『宮座の構造と村落——社会伝承研究Ⅲ——』社会伝承研究会、一九七四年）があり、福田アジオ「宮座の社会的機能」（『講座日本の民俗宗教』五、民俗宗教と社会、弘文堂、一九八〇年）、高牧實「宮座と村落の史的的研究」（吉川弘文館、一九八六年）、藤井昭「宮座と名の研究」（雄山閣、一九八七年）、住谷一彦「歴史民族学的コスモロジーの世界から」（『月刊歴史手帖』第一一七巻一、名著出版、一九八九年）等に詳細な整理がおこなわれている。歴史的研究以外では、高橋統一「宮座の構造と変化——祭祀長老の社会人類学的研究——」（未来社、一九七八年）、関沢まゆみ「宮座と老人の民俗」（吉川弘文館、二〇〇〇年）、古川彰「村の生活環境史」（世界思想社、二〇〇四年）等がある。

- (2) 「宮座」の項目（『縮刷版』社会学事典、弘文堂、一九九九年）。

- (3) 中山太郎「宮座の研究」（『社会学雑誌』六、一九二四年）。

- (4) 肥後和男「近江に於ける宮座の研究」（『東京文理科大学紀要』一六、一九三八年）。

- (5) 原田敏明『村祭と座』（中央公論社、一九七六年）二六二頁。
- (6) 肥後前掲「近江に於ける宮座の研究」五一頁。
- (7) 安藤精一『近世宮座の史的的研究』（吉川弘文館、一九六〇年）一一四～一一八頁。
- (8) 畿内の山城や大和の宮座のほうが概して構造が単一であり、近江はある雑多性を持ち、その限界が明瞭でないともいわれている。（肥後和男「近江の宮座について」（日本民族学会編『民族学研究』第二巻第四号、三省堂、一九三六年）四四～四五頁）。
- (9) 『福岡県神社祭事曆』（福岡県文化財調査報告書『第一七輯、福岡県教育委員会、一九五四年』）。
- (10) 拙稿「戦前戦後の宮座——古宮八幡神社の宮座事例より——」（『西日本宗教学雑誌』第二〇号、一九九八年）。
- (11) 拙稿「古要神社の傀儡子神事とニワタシ（荷渡し）」（『秀村選三編『西南地域史研究』第一輯、文献出版、一九九六年』）。
- (12) 拙稿「明治・大正期における村の動向と宮座——賀茂神社の神和（宮座）を事例として——」（『福岡県地域史研究』第一七号、福岡県、一九九九年三月）、一九九九年『日本史学年次別論文集』近現代三（二〇〇二年二月）再収。拙稿「近代における宮座の変容と持続——福岡県賀茂神社の神和（宮座）を事例として——」（『宗教研究』三三二二号、日本宗教学会、二〇〇二年六月）。
- (13) 拙稿「地域の都市化と宮座の変容——福岡県産宮神社を事例として——」（『福岡県地域史研究』第二二号、福岡県、二〇〇五年）。
- (14) 拙稿「宮座文書の「御神体」化について——古宮八幡神社（福岡県）の文書を事例として——」（平成一一年度史料管理学研修会長期研修課程修了レポート、国文学研究資料館史料館）、『福岡県地域史研究』第一八号（福岡県、二〇〇〇年三月）、二〇〇〇年『日本史学年次別論文集』日本史学一般（二〇〇三年三月）再収。
- (15) 拙稿「古宮八幡宮オマガリサマ（銅鏡）の研究——宇佐放生会銅鏡奉納神事——」（久留米大学大学院『年報』第二号、一九九六年三月）、拙稿「宇佐放生会傀儡子の舞と神相撲」（久留米大学大学院論集『比較文化研究』第二号、一九九三年八月）。
- (16) 中野幡能『八幡信仰史の研究』（吉川弘文館、一九六七年）四〇四～四二四頁。
- (17) 拙稿「古要神社大祭（宇佐放生会奉納神事）と韓国」の「コクトウカクシノルム」（『豊日史学』第五九巻一・二・三合集号、豊日史学会、一九九五年三月）、一九九九年『日本史学年次別論文集』日本史学一般（一九九九年三月）再収。
- (18) 韓国民俗劇研究所編梁民基・平井美津子訳『図解・韓国の伝統人形芝居コクトウカクシノルム』（現代人形劇センター、一九八六年）。
- (19) 宮家準『宗教民俗学』（東京大学出版会、一九九五年、初版一九八九年）、四四～四六頁。宮家準は宗教的象徴

を視覚・行為・言語象徴に分類している。このうち視覚象徴のなかで、本来俗なるものが、所定の時と場所において聖なるものをあらわすものとして、ホウキ・臼・杵・俵・家などがこれに属するとしている。

- (20) 高橋統一『宮座の構造と変化——祭祀長老の社会人類学的研究——』（未来社、一九七八年）一二〜一三頁、二五四〜二五五頁。

- (21) 原田前掲『村祭と座』二四頁。

- (22) 原田前掲『村祭と座』一七頁、二四頁。

- (23) 宮座解体要因は次の九つの参考文献から抽出した。池田昭『株座の解体過程——京都市左京区八瀬——』（『社会と伝承』第二巻第二号、社会と伝承の会（以下同）、一九五八年）、同『宮座と村落構造』（『社会と伝承』第六巻第三号、一九六二年）、同『宮座の変貌過程（村落構造との関連）——滋賀県野洲郡守山町勝部——』（『社会と伝承』第九巻第一号、一九六五年）、同『宮座の変貌過程（統）（村落構造との関連）——滋賀県甲賀郡信楽町宮尻——』（『社会と伝承』第九巻第二号、一九六五年）、伊藤芳枝『筑前嘉穂郡における宮座の崩壊』（『宗教研究』一七四、一九六三年）、花島政三郎『部落の統合と宮座——滋賀県神崎郡永源寺町九居瀬——』（『社会と伝承』第八巻第二号、一九六四年）、原田敏明『座の封鎖性』（『社会と伝承』第九巻第一号、一九六五年、前掲『村祭と座』に収録）、仲村研『山国五社明神宮座の解体過程——丹波山国農兵隊成立史——』（『社会科学』

- 九、同志社大学人文科学研究所、一九六八年）、高橋前掲『宮座の構造と変化』、第五・六章、松永和人『福岡県八女市近郊農村における年中行事——氏神祭祀を中心として——』（『福岡大学人文論叢』第一二巻第三号、一九八〇年）。

- (24) 鈴木栄太郎『日本農村社会学原理』（時潮社、一九四二年、初刷一九四〇年）、三九七頁。鈴木栄太郎は氏神神社を村の象徴として次のように述べている。「氏神の神社は自然村の象徴である。幾百年も前より存続して来たと共に今よりも永久に存続す可きものと信ぜられる氏の氏子たる事の自覚によって、村人は、古き歴史を持ち今からも長き生命をもつ可き村と云ふ超個人的存在の一部分である事を、相互に明瞭に体認するのである」。

〔付記〕 本論文は、博士（文学）学位論文（二〇〇六年、久留米大学）の内容要旨である。

（やまぐち のぶえ・福岡県地域史研究所研究員）